

『無量寿経論』と『論註』

辻本俊郎

一、はじめに

曇鸞（西暦四七六～五四二年）『論註』の中には世親（西暦四〇〇～四八〇年）著・菩提流支漢訳『無量寿経論』の全文が引用されている。そこでかつて筆者は、「高麗再雕版」所収および宋「磧砂版」所収の『無量寿経論』と親鸞加點本『論註』に引用された『無量寿経論』本文を抜粋し、それらを比較対照させて字句の異同や改行箇所などを明らかにし、公にした（辻本（一九九九））。

その結果、『無量寿経論』と『論註』に引用された『無量寿経論』本文は全く別の書物であると言っているほど、字句の異同が著しいことが判明したのである。

実はこのような『無量寿経論』に対するテキストの字句の異同に関する研究というのは、すでに大正時代に行われていたのである。すなわち、高瀬承厳（一九一七）と大須賀秀道（一九二七）とである。前者は、つまり高瀬論文は、『浄土宗全書』第一巻所収『無量寿経論』を基本として、「宋版」、「元版」、「明版」所収の『無量寿経論』との字句の異同のある箇所のみを採り上げて対照表を作成している。しかし、石刻本や写本、あるいは『論註』に引

用された『無量寿経論』本文については全く言及していないのである。

それに対して注目すべきは、後者の大須賀論文である。大須賀は『無量寿経論』流布本と蔵経本『無量寿経論』とを比較対照した結果、相当の文字の出入、増減の多いことを明らかにした。さらに、その結果を踏まえて『無量寿経論』流布本は『論註』に引用される『無量寿経論』から還元したものではなからうか、と推測しているのである。このことは『無量寿経論』流布本と高麗再雕版や宋東禪寺版、宋思溪版、元杭州版などの「大蔵経」所収『無量寿経論』との字句の異同や改行箇所については筆者の研究（辻本（一九九九））からも首肯されるのである。すなわち、『無量寿経論』流布本である『浄土宗全書』第一卷所収（義山版を底本とする）や『浄土真宗聖典七祖篇（原典版）』所収のそれ（兵庫県豪撰寺所蔵永享九年本を底本とする）は、まさしく「大蔵経」所収ではなくて、『論註』に引用される『無量寿経論』本文の字句の異同とはほぼ一致するのである。³⁾

さて、ここで、問題が一つ生じてくるのである。すなわち、それは『論註』に引用された『無量寿経論』と古写本や「大蔵経」所収『無量寿経論』のいずれが『無量寿経論』のオリジナル・テキスト、あるいはそれに近いのであるうか、という問題である。

大須賀（一九二七）はこの問題に対して、「大蔵経」所収の『無量寿経論』は流布本に比べて字数が少なく、文章が簡略されている点から考えて、「大蔵経」所収『無量寿経論』が原始的ではないかと推測した。ところが、論を進めていくとその推測を覆すのである。すなわち、「大蔵経」所収『無量寿経論』よりも流布本の方が、より原始的な要素を有していると結論づけるのである。それは以下に挙げる三つの点によるのである。

①流布本は、『論註』に引用される『無量寿経論』本文と一致し、菩提流支の漢訳後、直ちに曇鸞が註を施したものである。

②もし、『論註』が存在しなかったとするならば、『無量寿経論』は現存しなかったかもしれない。『無量寿経論』が後世にまで伝えられたのは、『論註』の力である。

③「大蔵経」所収『無量寿経論』には文章が簡略されているのは、必ずしも原型たる理由にならない。

まずもって、大須賀の指摘する、この三つの根拠の中で、②「『論註』が存在しなかったとするならば、『無量寿経論』は現存しなかったかもしれない。『無量寿経論』が後世にまで伝えられたのは、『論註』の力である」という根拠については賛同できない。何故ならば、中国において曇鸞『論註』が流布した形跡が認められるのは唐代までであり、しかも、その後は失われて「大蔵経」に入蔵されていないし、逆に入蔵されたのは『無量寿経論』だったからである。また、③については我々を納得させるような根拠を挙げてはいないのである。

そのような中で近年になって三宅徹誠も『論註』に引用された『無量寿経論』がオリジナル・テキストに近いのではないか、という見解を学界に提出している（三宅「二〇〇八」、「二〇一〇」）。三宅によると曇鸞は『無量寿経論』漢訳者菩提流支によって浄土教に帰入したのであるが、もし、その際に漢訳者より『無量寿経論』を授けられたのであれば、曇鸞『論註』に見られる「無量寿修多羅優波提舍願生偈略解義竟」という文のある『無量寿経論』⁴こそが、本来の『無量寿経論』であるとするのである。

すなわち、大須賀説の「①流布本は、『論註』に引用される『無量寿経論』本文と一致し、曇鸞が註を施したものである」という見解と同じくし、三宅は「『論註』所引本オリジナル・テキスト説」を採るのである。

なるほど、『無量寿経論』に対して註を施した曇鸞は菩提流支によって漢訳された時代に生きた人であることは疑いない史実である。このことからすると『論註』に引用された『無量寿経論』、ひいては流布本（『論註』所引本『無量寿経論』）がよりオリジナルに近いと考えられるのであろうが、事情は決してそう簡単ではない。というの

は、注目すべきは菩提流支によって漢訳された後、わずか四〇数年後に刻された響堂山石刻本『無量寿経論』の存在である。これは北斉時代（西暦五五〇～五七七七年）に刻されており、長行部分はないものの、その字句の異同は、筆者の研究（二〇二一）によれば、『論註』所引本『無量寿経論』とは異なり、むしろ正倉院聖語藏写本や金粟山大藏経写本などの古写本系を支持していることが明らかになったのである。⁶⁾

さらに言えば、『無量寿経論』が広く流布する隋代においては、淨影寺慧遠（西暦五三三～五九二年）『觀無量寿経義疏』に引用される『無量寿経論』本文は、『論註』所引本『無量寿経論』ではなく、日本に伝わった古写本の系統と一致するのである。⁷⁾つまり、菩提流支による『無量寿経論』漢訳直後には、比較的早い時期に二つの『無量寿経論』テキストの系統、すなわち、『論註』所引本『無量寿経論』と古写本系のそれがすでに流布していたのである。したがって、この理由からも大須賀の②『論註』がなければ、『無量寿経論』は流布しなかったであろう、とするのは全く容認できない。さらに言うならば、大須賀の①、三宅の『論註』に引用されているからという理由で『論註』所引本がオリジナル・テキストであるという説を採用するならば、それとは異なる古写本の系統が、北斉や隋代にすでに流布していたことの矛盾点をどう解決するのか、ということについての説明が全くないために『論註』所引本オリジナル・テキスト説への疑いは氷解しないのである。

それでは、『無量寿経論』のオリジナル・テキストはいずれであろうか。ということになる。ここでは、『無量寿経論』の漢訳年代説（西暦五三一年説、西暦五二九年説）を手かがりとしながら『無量寿経論』テキストについて一考察を試みる。ただし、サンسكريット語原典が現存せず、チベット語訳もなく、漢訳本のみ存する場合に漢訳本をオリジナル・テキストとして捉えるのか、あるいは漢訳を通じてのオリジナル・テキストとして捉えるのか、という問題点も生じるが、ここでいう『無量寿経論』オリジナル・テキストというのはサンسكريット語原典としての『無

量寿経論』ではなく、菩提流支漢訳のそれを指すこととする。

なお、ここでは基本的に『無量寿経論』、『論註』については浄土真宗本願寺派総合研究所(二〇一三)をテキストトとして使用した。したがって、文中にある頁数は、その他の頁数である。その他のテキストについては「大正新脩大藏経」を使用した。

二、菩提流支と曇鸞

曇鸞は、四論、すなわち、『中論』、『十二門論』、『大智度論』、『百論』を専攻し、曇無讖(西暦三八五〜四三三年)漢訳『大方等大集経』(瓔珞品〜宝髻菩薩品までの二六卷、及び日密分三卷)に注釈を施そうとしたことはよく知られている。

道宣(西暦五九六〜六六七年)『統高僧伝』(西暦六四五年)巻六によれば、

内外経籍具陶文理而於四論仏性彌所窮研。讀大集経恨其詞義深密難以開悟因而注解。文言過半使感氣疾權停功周行醫療。(中略)顧而言曰。命惟危脆不定其常。本草諸經具明正治、長年神仙往往間出。心願所指修習斯法、

果剋既已方崇佛教、不亦善乎。承江南陶隱居者方術所歸。廣博弘瞻海内宗重。遂往從之(大正五〇卷四七〇上)。とあり、内外の経籍、具に文理に親しんで四論、仏性についてますます研究するようになった。『大集経』を読んで、その意味が深密であり、理解しがたいものであると悟って、注釈を施そうとし、半分ほど注釈した後、気疾(精神病、一種のノイローゼ)を患って一旦筆を置いて治療に専念した。また、曇鸞が言うには、「命はただ危脆であつて、決して常住のものではない。今、目指すところは、神仙の法を修得して、成果があがれば、再び仏教の研究に取り

掛かろう」と心に決めて、江南に居る陶隱居（陶弘景、西暦四五六～五三六年）を訪ねて神仙の法を身につけようとしたのである。ここで注意が必要なのはあくまでも曇鸞の最終目的は長生の術を得て仏教を研究しようとしていることである。もともと、曇鸞は『大集經』の注釈を志していたが、曇鸞の意識の中では「仏教の研究」のための「仙術」なのである。

その後、陶隱居を訪ねた後、曇鸞は菩提流支と出会うのである。すなわち、

道宣『統高僧伝』巻第六には、

因即辭還魏境。欲往名山依方修治。行至洛下。逢中國三藏菩提留支。鸞往啓曰。佛法中頗有長生不死法勝此土

仙經者乎。留支唾地曰。是何言歟。非相比也。此方何處有長生法。縱得長年少時不死。終更輪廻三有耳。即以

觀經授之曰。此大仙方依之修行當得解脫生死。鸞尋頂受。所齋仙方並火焚之（大正五〇卷、四七〇中～下）。

とある。

ここでは曇鸞が菩提流支に対して「仏法の中で長生不死の法で仙經に勝るものはあろうか」と質問している。それに対して菩提流支は、曇鸞に量良耶舍訳（西暦四二四～四五三年頃に漢訳）『觀無量壽經』を授けたとあるのである。

これを踏まえて、曇鸞と菩提流支とのやりとり、すなわち、短い会話を再考すると、「仏法の中で長生不死の法で仙經に勝るものはあろうか」という質問に対する菩提流支の答えとして、「觀無量壽經」だとしてそれを授けた」ということである。これが、いわゆる「觀無量壽經」授与説である。これについて、藤堂恭俊は、『觀無量壽經』が北魏時代に流布していないとして、「觀無量壽經」授与説に懐疑的な立場を採っている⁸⁾。しかしながら、現存していないが、菩提流支には、『譯衆經論目錄』という経録もあつたことが費長房『歷代三宝紀』（大正四九卷、八六中）や、道宣『大唐内典録』（大正五五卷、二六九中）に記録されている。早くに失われてその内容は全く不明だが、

この経録の題名から察するにその内容は「漢訳された経典や論書の目録」であろう。つまり、当時、北魏に漢訳『観無量寿経』が流布していたという確たる史料がなくとも、『観無量寿経』を菩提流支が所持していたという事は何ら不思議なことではない。むしろ所持していたと考えるのが自然であろう。さらに言えば、仏法の中で仙経よりもすぐれたものがあるか、という問いに対しての『観無量寿経だ』という会話しか記録されていないが、この場で曇鸞に対して菩提流支が浄土思想、あるいはそれについての経典や論書の、ある程度の伝授や教示があったと解釈するのが自然ではないだろうか。しかしながら、菩提流支と曇鸞はその会座を長く共にしたということは全く考え難いのである。なぜならば、菩提流支の漢訳した経論の中には唯識思想が見られるものも多数存在するが、曇鸞の著作の中ではそれらが全くといっていいほど反映されていないことから判断できるのではなからうか。いずれにせよ、その中に菩提流支と曇鸞が出会った際に菩提流支より『観無量寿経』をはじめとする浄土思想を説く、いくつかの経論の紹介があったはずであり、当然のことながら『無量寿経論』西暦五二九年訳出説を採るならば、菩提流支自ら訳した『無量寿経論』も含まれていた可能性が非常に高いと考えられるのである。これに対して、曇鸞が註釈を加えたものが『論註』そのものである。

三、曇鸞と『論註』

菩提流支漢訳の経論の中で、実際に曇鸞が自身の著作の中で引用したのは次の七つである。

- ① 『入楞伽経』（西暦五一三年漢訳）
- ② 『不増不減経』（西暦五二〇～五二四年漢訳）

- ③ 『十地経論』（西暦五〇八年漢訳）
- ④ 『妙法蓮華経優婆塞舍』（西暦五〇八年漢訳）
- ⑤ 『金剛般若経論』（西暦五〇九年漢訳）
- ⑥ 『勝思惟梵天所問経論』（西暦五一八年漢訳）
- ⑦ 『文殊師利問菩薩経論』（伽耶山頂経論）（西暦五三五年漢訳）

この中で『文殊師利問菩薩経論』（伽耶山頂経論）（西暦五三五年漢訳）のみが、菩提流支と曇鸞の接点を確認できる大通年間（西暦五二七〜五二九年）以降の漢訳されている唯一の論書である。⑩ ということは、玄中寺にいた曇鸞が菩提流支の漢訳テキストを比較的入手しやすい環境にあったということである。⑪ つまり、詳細は後述するが『無量寿経論』西暦五三一年漢訳も捨てがたいことになる。

さて、『無量寿経論』のオリジナル・テキストを追究するにあたり、『論註』所引本の『無量寿経論』本文だけでなく、『論註』の釈文にも目を向ける必要がある。

『論註』所引本の『無量寿経論』本文に「菩薩如是修五念門行自利他速得成就」（五二七頁）という文がある。⑫ 実はこの文では、正倉院聖語蔵写本、宋・東禪寺版大蔵経、金粟山写本大蔵経、宋・磧砂版大蔵経、高麗再雕版大蔵経などの『無量寿経論』テキスト、つまり、『論註』所引本『無量寿経論』テキスト以外は、すべて「菩薩如是修五門行自利他速得成就」となっており、『論註』所引本のみが「五念門」と引用しているのである。

ところで、曇鸞はその注を施す中で再度、この文を引用しているのであるが、不思議なことにそれには「答言論曰修五門行以自利他成就故」（五二八頁）と引用しているのである。

つまり、曇鸞は「菩薩如是修五念門行自利他速得成就」の注釈に対して、完全には一致しないが、「論曰」と

して同じ文を引用して「修五門行」云々とするのである。ここでは「念」という文字、わずか一字の出入ではあるが、「五念門」ではなく、「五門」とはつきりと記しているのである。しかも、それは古写本系の『無量寿経論』テキストを支持しているのである。果たして、これは何を意味しているであろうか。曇鸞は『論註』所引本の『無量寿経論』テキスト以外に、いわゆる古写本系の『無量寿経論』テキストの祖本をも参照していた可能性があるのではないか。言い換えれば、曇鸞は二種類の『無量寿経論』テキストを見て、『論註』を著した可能性が高いのではないかということである。⁽¹³⁾

以上のことを勘案すると、曇鸞は西暦五二九年に菩提流支より直接授かった『無量寿経論』テキスト（『論註』所引本）に対して註を施しつつ、その際に古写本系の『無量寿経論』テキスト、すなわち、二本の『無量寿経論』テキストを参照して、『論註』を著したのではないだろうか。

四、菩提流支と『無量寿経論』

菩提流支は、『無量寿経論』を訳主であることはよく知られている。しかし、その漢訳年代となると、諸経録の上で二種の訳出年代が記載されているのである。すなわち、一つが普泰元年、もう一つが永安二年である。これを西暦にするとそれぞれ西暦五三二年と西暦五二九年である。たった二年の差であるが、曇鸞『論註』との関係において大きな問題となるのである。

すでに述べたように曇鸞が大通年間（西暦五二七〜五二九年）に菩提流支と出会ったという、道宣『続高僧伝』が確認できる唯一の史料である。もしも、この時、曇鸞が菩提流支より『無量寿経論』を受け取ったとすると、そ

の漢訳年代は西暦五二九年であれば矛盾は生じないのである。しかし、漢訳年代が西暦五三一年であれば、『無量壽經論』は曇鸞と菩提流支が出会った時、まだ訳出されていないことになるのである。

ここで『無量壽經論』の訳出年代を明記している「経録」について見てみよう。すなわち、隋・費長房『歴代三宝紀』(西暦五九七年)、唐・道宣『大唐内典録』(西暦六六四年)、唐・明佺『大周刊定衆経目錄』(西暦六九五年)、唐・智昇『開元釈経録』(西暦七三〇年)、唐・円照『貞元新定釈教目錄』(西暦八六〇年)である。

・費長房『歴代三宝紀』卷第三には、
 廣陵王位 改普泰元年。攝大乘論本三卷、佛陀扇多出。勝思惟經論、無量壽優波提舍等、菩提流支出(大正四九卷四四下)。

さらに同じく『歴代三宝紀』卷第九には、
 無量壽優波提舍經論一卷 普太元年出僧辨筆受(大正四九卷八六上)である。

・道宣『大唐内典録』卷第四には、
 無量壽優波提舍經論、普泰元年僧辨筆受(大正五五卷二六九中)。

卷第六には、
 無量壽經論八紙、後魏菩提流支譯(大正五五卷二九五下)。
 とあり、訳出年代以外にも、八紙という分量も記している。

・明佺『大周刊定衆経目錄』卷第六には、
 無量壽經論一卷八紙優波提舍造、右後魏普泰元年菩提流支譯、出内典録(大正五五卷四〇七下)。

とあり、道宣『大唐内典録』を踏襲している。これらの経録はすべて普泰元年、すなわち、西暦五三二年説を採っている。

これに対して、西暦五二九年説を採る経録は次の二つである。

・唐・智昇『開元釈経録』巻第六には、

無量壽経論一卷、題云無量壽経優波提舍願生偈婆敷盤豆菩薩造、永安二年、於洛陽水寧寺出、僧辨筆受（大正五五卷五四一上）

卷第十九には、

無量壽経論一卷題云無量壽経優波提舍願生偈七紙（大正五五卷六八九下）。

とある。

・円照『貞元新定釈教目録』には、

無量壽経論一卷、題云無量壽経優波提舍願生偈婆敷盤豆菩薩造、永安二年、於洛陽水寧寺出、僧辨筆受（大正五五卷八三九中）

とあり、円照は、智昇『開元釈経録』の見解を採用している。

隋・法経『衆経目録』（『法経録』（西暦五九四年）、隋・彦惊『衆経目録』（『彦惊録』（西暦六〇二年）、唐・静泰『衆経目録』（『静泰録』（西暦六六五年）、唐・靖邁『古今訳図紀』（唐・高宗の時（西暦六四九～六八三年）については『無量壽経論』の漢訳年代についての記載はない。

さて、果たして、どちらの説が正しいのであろうか。なるほど、先ほど見たように、『続高僧伝』によると菩提流支と曇鸞の出会いが大通年間（西暦五二七～五二九年）であったとの記事からすると『無量壽経論』の漢訳年代

が西暦五二九年ならば、漢訳が完成したばかりの『無量寿経論』を受け取ったことになろう。また、西暦五三二年ならば、『無量寿経論』は、大通年間にはまだ漢訳されていないのであって、大通年間以降、菩提流支より直接的、あるいは間接的に受け取ったということになろう。

どちらの説を是とするかについて、筆者はどちらも正しいと考えている。つまり、西暦五二九年に一度漢訳された『無量寿経論』（『論註』所引本『無量寿経論』）が再度西暦五三二年（古写本系の『無量寿経論』）に手直しされたのではないかと考えている。前述したように、『無量寿経論』テキストが『論註』所引本は曇鸞によって、古写本系の『無量寿経論』テキストが、北斉時代の石刻本によって、すなわち、漢訳直後といいいいほど、比較的早い時期に二系統の『無量寿経論』テキストが確認できるからである。しかも、費長房『歴代三宝紀』の西暦五三二年説もまた、以下のような理由によって整合性がみとめられよう。すなわち、

① 『歴代三宝紀』は、他の経録と異なつて、訳経の歴史を重要視して編まれたものである。したがつて、訳出年代については、より注意深く調査されてのものと考えられる。

② 『歴代三宝紀』の成立は西暦五九七年であり、『無量寿経論』の漢訳年代は西暦五三二年（あるいは西暦五二九年）、その間はずか七〇年にも満たないということである。

③ 費長房は『歴代三宝紀』を編む際に参照した李廓『魏世衆経目録』は、北魏天平年（西暦五三四～五三七年）に編まれていて、まさしく菩提流支漢訳の時代に完成した経録であるということである。

④ 費長房は、菩提流支が編んだ『訳衆経論目録』（現存しない）の存在を『歴代三宝紀』に記載しているということである。

⑤ 十餘年來、詢訪耆老、搜討方獲。雖粗緝綴猶慮未周。廣究博尋求敬俟來後、今之所撰集。略准三書以爲指南（大

正四九卷、一二〇下）とあるように、諸経録、經典、論書などを採し求めて、十数年という長い年月をかけて、より完成度の高い経録を完成させたということである。

⑥これに対して智昇『開元釈経録』の完成は西暦七三〇年であり、『無量寿経論』の訳出よりおよそ二〇〇年も経っているということである。

四、まとめ

これまで菩提流支による『無量寿経論』の漢訳年代には二種類の説があることはよく知られてきたが、不思議なことにそれについて検討した論考は一つもなかったのである。しかし、ここで一つの仮説を学界に提出したい。

以前の筆者の研究（一九九九）により、『論註』所引本の『無量寿経論』と「大藏経」所収の『無量寿経論』とは、一卷という短い論書であるにもかかわらず二〇〇字近い、字句の異同が見られることが判明した。

また、筆者の最近の研究（二〇一八、二〇二一）により菩提流支の漢訳直後、早い時期に『論註』所引本『無量寿経論』と古写本系『無量寿経論』テキストの二系統が流布していたことが明らかになったのであるが、前者は菩提流支より西暦五二九年に直接授けられたもので、後者は、西暦五三一年に漢訳されたものである。つまり、菩提流支は『無量寿経論』を二度漢訳しているのである。このように考えると、なぜ漢訳直後に二つの系統の『無量寿経論』テキストが流布していたのかという疑問も解消できるのである。

それでは、どちらのテキストがオリジナル・テキストになるのであろうか、という問題が生じる。例えば、あるサンسكريット語テキストが「甲」として漢訳され、その後、その作品に対して同一訳者が、手を加え、より完成

度の高い「乙」が漢訳された場合、「甲」を訂正したのが「乙」であるので、「乙」に合理性があると考えられるのである。したがって、その場合、「乙」がオリジナル・テキストであると言えよう。

したがって、『無量寿経論』の場合、西暦五二九年に菩提流支によって漢訳された『無量寿経論』の文言や本文を整理したものが、西暦五三一年に同じく菩提流支によって再度漢訳された『無量寿経論』、すなわち、それがまさしく清書版である。つまり、西暦五三一年に漢訳された『無量寿経論』テキストが菩提流支にとって、より完成度の高いものであると考えられる。

『無量寿経論』オリジナル・テキストは、高瀬、三宅の主張する『論註』所引本『無量寿経論』ではなく、正倉院聖語藏本や金粟山大蔵経写本の古写本系『無量寿経論』であると考えられるのである。

【参考文献】

石川啄道（二〇〇九）『曇鸞浄土教形成論―その思想的背景―』法蔵館。

大内文雄（二〇一三）『南北朝隋唐期佛教史研究』法蔵館。

大須賀秀道（一九二七）「浄土論の譯本に就いて」大谷大学『仏教研究』第八卷第四号。

川口義照（二〇〇〇）『中国仏教における経録研究』法蔵館。

黒田浩明（二〇一四）「曇鸞における思想と信仰の交渉―菩提流支との邂逅を手がかりとして―」中村薫編『華嚴思想と浄土教』

文理閣。

岸一英（一九九九）「無量寿経論校異の意義」『無量寿経論校異』佛教大学総合研究所。

齊藤隆信（二〇一五）『中国浄土教儀礼の研究 善導と法照の讃偈の律動を中心として』法蔵館。

桜部建（一九九七）『増補 仏教語の研究』文栄堂書店。

佐藤心岳（一九六三）「中国における梵語佛典の重視」佛敎大学『研究紀要』第四四・四五号。

柴田泰山（二〇一四）『観無量寿経』の信仰と実践』『日本仏敎学会年報』第七九号。

浄土真宗本願寺派総合研究所（二〇一三）『浄土真宗聖典全書（一）三経七祖篇』本願寺出版。

真宗勸学寮（一九三九）『浄土論註校異』真宗勸学寮。

高瀬承厳（一九一七）『類本往生論に就きて』『仏書研究』第二九号。

武田龍精（二〇〇八）『曇鸞浄土敎の思想史的背景と大乘哲学的原理』武田龍精『曇鸞浄土敎思想の研究』永田文昌堂。

陳垣（西脇常記、村田みお訳）（二〇一四）『中国仏敎史籍概論』知泉書館。

辻本俊郎（一九九九）『無量寿経論』テキスト考』『無量寿経論校異』佛敎大学総合研究所。

辻本俊郎（二〇一七）『無量寿経論』とBodhiruci』『アジア学科年報』第四号。

辻本俊郎（二〇一八）『中国における『無量寿経論』テキストの受容』『仏敎学会紀要』第二三三号。

辻本俊郎（二〇二〇）『曇鸞』論註』テキスト考』『仏敎学会紀要』第二五号。

辻本俊郎（二〇二二）『無量寿経論』テキスト研究—響堂山石刻本、金粟山大蔵経写本を中心として—』『仏敎学会紀要』第二六号。

藤堂恭俊（一九九五）『曇鸞—浄土敎を開花せしめた人と思想—』『浄土仏敎の思想』第四卷、講談社。

野上俊静（一九七〇）『中国浄土三祖伝』文栄堂。

幡谷明（一九八九）『曇鸞敎学の研究—親鸞敎学の思想的基盤—』同朋舎。

幡谷明（一九八九）『曇鸞敎学の研究—親鸞敎学の思想的基盤—』資料篇—』同朋舎。

藤善眞澄〔二〇一三〕『中國佛教史研究 隋唐佛教への視角』法蔵館。

佛敎大学総合研究所〔二〇一一〕『浄土敎典籍目録』佛敎大学総合研究所。

佛敎大学総合研究所「浄土敎の総合的研究」研究班〔一九九九〕『無量寿経論校異』佛敎大学総合研究所。

船山徹〔二〇一三〕『仏典はどう漢訳されたのか— ストーラが経典になるとき』岩波書店。

三宅徹誠〔二〇〇八〕「保延四年写『無量寿経優婆提舍願生偈註』「解題」、金剛寺蔵保延四年写本より見た日本における『無

量寿経優婆提舍願生偈註』の伝承」日本古写経善本叢刊第三輯『金剛寺蔵観無量寿経 無量寿経優婆提舍願生偈註卷下』

国際仏敎大学院大学学術フロンティア実行委員会。

三宅徹誠〔二〇一〇〕「金剛寺蔵保延四年写本より見た日本における『無量寿経優婆提舍願生偈註』の伝承」『古写本研究

の最前線— シンポジウム講演資料集成—』国際仏敎大学院大学学術フロンティア実行委員会。

宮嶋純子〔二〇一四〕「胡語から梵語へ— 日中仏敎文献におけるインド・西域言語の認識—」佐藤文子・原田正俊・堀裕編『仏

敎がつなぐアジア』勉誠出版

李利安・崔峰〔二〇一八〕『南北朝佛敎編年』三秦出版社。

註

(1) 桜部建〔一九九七〕は、「いまわれわれの手に遺されている菩提流支訳の諸経論は、一方において、インド仏敎学の分野からすれば、論師世親の大乗經典解釈を知る重要な資料であるということになるし、他方において、シナ仏敎学の分野からいえば、インドにおいて述作された大乗論書の一形式がシナにどのように伝来されどのように受容されたかを知るための一つのまとまった材料になる」と述べている。

- (2) 曇鸞は、『論註』の長行において、「解義分」を十に分けて、註を施しているが、大藏經、古写本系の『無量寿経論』テキストの中でこの形式に基づいて改行を施しているテキストは一つも存在しないのである。これに関しては、辻本（一九九九）を見よ。
- (3) 詳細については辻本（一九九九）を見よ。
- (4) 「無量寿修多羅優婆塞願生偈略解義竟」という一文は『無量寿経論』テキストすべてに見られるのではない。この一文が見られるのは宋・東禪寺版などであって、正倉院聖語藏写本、高麗再雕版、房山雲居寺石刻本などでは見られない。
- (5) ただし、一言で『論註』テキストといっても現在、我々が見ることのできる『論註』テキストは何本もある。したがって、この場合、本来三宅徹誠ほどの『論註』テキストが原形であるのかを検討すべきであろう。三宅は「院政期の金剛寺本や親鸞加点本などの最古の『論註』諸本群」としているが、筆者の説からすると、なるほどそれらは最古の『論註』テキストであるけれども、決して『論註』の古い情報を我々に伝えているわけではないのである。むしろ、本願寺蔵本や義山版本の方がより古い情報を有しているのである。詳細については辻本（二〇二〇）を見よ。
- (6) 詳細については辻本（二〇二二）を見よ。
- (7) この詳細については辻本（二〇二八）を見よ。
- (8) 藤堂恭俊（一九九五）二三―二四頁。
- (9) 岸一英は、西暦五二九年漢訳説は、大通年間との整合性を持たせるものではないかと推測している（岸（一九九九））。
- (10) 藤善眞澄は、『論註』は、北魏が東西に分裂する頃、東魏の孝静帝の天平年間（西暦五三四―五三七年）よりのちに比定するのが妥当であるとする（藤善（二〇一三）三二一―三二二頁）。

(11) 『論註』には次に記すように、訳者を批判するような文言も見られる。すなわち、「譯者何縁目彼寶爲草耶。(中略) 余若參譯當別有途」(四六二頁)。とあるように、もし、訳場に参加したならば、別の訳語を提出できたという。しかし、曇鸞はその訳語を自らの著作の中に明らかにしていないが、別の訳語を提出できると明言したということは曇鸞がサンスクリット語を解することができたということを物語っている。しかも、齊藤隆信によれば、曇鸞の『讚阿弥陀仏偈』について、押韻や平仄は認められないものの、割裂は全く見られず、かつ句中の節奏点も守られていて、一定のリズムも維持していると評価している(齊藤隆信(二〇一五)一五四〜一六〇頁)。すなわち、曇鸞はサンスクリット語も解し、また漢詩の素養をも持ち合わせていたということになろう。

(12) 親鸞加点本をはじめとする『論註』テキストは、「五念門」となっており、ただ一本、金剛寺蔵保延四年書写本のみが「五門」となっている。

(13) ただし、曇鸞の著作、『論註』、『讚阿弥陀仏偈』、『略論安樂浄土義』の中で、『論註』所引本の『無量寿経論』ではなく、大藏経に見られるような『無量寿経論』テキストの痕跡が認められるのはこころいかな。

(14) 藤堂恭俊は、道宣『統高僧伝』の中の「北國虜僧曇鸞」(大正五〇巻四七〇上)という文言に注目し、曇鸞が当時、北魏と緊張関係にあった梁に入国する際に「北國虜僧曇鸞」と記録されたのであるから、曇鸞の梁への入国は、元顯が大敗した、西暦五二九年七月以降のことであろうとする(藤堂(一九九五)十六頁)。